

間投詞に関する考察：間投詞はコミュニケーションのための  
言語表現であるのか

**On Interjections: Are Interjections Communicative Linguistic  
Devices?**

西川 裕理



## 1. はじめに\*

話者の驚き、ショック、喜びなどの感情を表す言語表現は、日常会話で話し手に多用されている。(1) と (2) は、その事実がよくわかる例である。(1) はコミック *NARUTO* から、サスケの兄であるイタチの真実を、イタチを良く知るマダラがサスケに説明している場面、(2) は TV series の *FRIENDS* から、Paul がデートの相手である Monica に、自分の秘密を打ち明ける場面である。太字、斜体になっている部分がそのような言語表現である。

- (1) Madara: So that was Itachi's trick, *eh*...too bad it didn't work.  
Sasuke: ...*Uh*...What are you talking about?  
(Kishimoto, M. 2009. *NARUTO*. volume 43, p.142)
- (2) Monica: What were you going to say?  
Paul: *Well, well*, ever since she left me, *um*, I haven't been able to perform...sexually.  
Monica: *Oh, god, oh, god*. I'm so sorry.  
Paul: It's okay.  
Monica: Being spit on is probably not what you need right now. *Um...ooh*. How long?  
Paul: Two years.  
Monica: *Wow*. (10:13-, "Where It All Begin", *FRIENDS*, Season 1.)

これらの言語表現は「間投詞 (interjections)」(感動詞、感嘆詞) と呼ばれる。(1) と (2) の例から、話者は会話の際に間投詞を頻繁に使用していること、また、それを発話しようと意識していない、つまり無意識に発話していることがわかる。聞き手の方も、話し手によって発話された間投詞の意味をいちいち推測したり、気にしたりしていない。仮に、話し手と聞き手にとって、発話された間投詞が意味をもたない単語であるとすれば、この世にはコミュニケーションを意図しない言語表現が存在することになる。

守田 (2016: 82) は、コミュニケーションを「発信者の信号によって受信者が影響を受け、発信者にとって何らかの利益に結びつく行為」と定義した上で、言語が『思考かコミュニケーションか』という問い自体がほとんど意味をなさない (守田 2016: 91)」とし、「一方ではコミュニケーションに思考の複雑さが支えられている面があると考えられ、他方ではコミュニケーション自体も思考が複雑になるということによって (=言語が発生したことによって) 変質した (守田 2016: 97)」と述べ、「思考とコミュニケーションのいずれかを重視する立場は、進化の過程における別々の段階に位置づけられる (守田 2016: 91-92)」と主張している。しかし、これは言語全般に対する主張である。言語内である要素 (例えば間投詞) が思考のために使われるのか、コミュニケーションのために使われるのかは、

個別の問題として考えることができるだろう。

本稿では、Chomsky (1992: 49) が言うように「言語は思考の道具である」ため、言語が持つコミュニケーション機能はあくまでも二次的なものであるとする立場と、それと相反する立場である西川 (2002) や水野 (2006) の主張のように、発話された間投詞はコミュニケーション機能を持つという2つの先行研究を軸に、間投詞の機能を細分化し、間投詞がコミュニケーションのための言語表現であるのかについて考察する。そして、間投詞のコミュニケーションとしての機能は副次的なものであるという結論を出す。

## 2. 定義と比較

本章では、まず間投詞の定義を確認し、本稿で扱う間投詞の種類を絞る。それから例を用いて間投詞を区別し、意味を持たない間投詞と意味を持つ間投詞を比較する。

### 2.1. 間投詞の定義とその種類

辞書で interjection は、(3) と (4) のように定義されている。

- (3) a short sound, word or phrase spoken suddenly to express an emotion.  
(*Oxford Advanced Learner's Dictionary NEW 9<sup>th</sup> Edition*, p.821)
- (4) a word or phrase used to express a strong feeling such as shock, pain, or pleasure  
(*LONGMAN Dictionary of Contemporary English 6<sup>th</sup> EDITION*, p.963)

間投詞は話者の「咄嗟の感情や強い感情を表す単語、あるいは句」であり、主に会話やテキストなどの「口語」で用いられ、基本的に新聞や論文などの文語では用いられない。また、Honestly she is good. の Honestly のように、後に続く主文を修飾することはない。Oh she is good. であれば oh と she is good はそれぞれ独立しているため、「合成性がない」単語である。

さらに、間投詞には3つの種類がある。1つ目は、uh-huh, yeah, really? のように、「呼応」として用いられるもの、2つ目は、ah, oh, wow, ugh のように、「感情」を表すもの、3つ目は、hey や look のように、「呼び掛け」として使用されるものである。本稿では、2種類目の「感情」を表す間投詞を扱う。1種類目や3種類目は概念的意味を持つ単語が含まれているため、考察の対象から外す。

## 2.2. 間投詞の比較

ここまで、間投詞は話者によって「無意識に」発話され、聞き手も意識していないと述べてきたが、もちろん話し手に「意識的に」発話され、聞き手がその間投詞の意味を推測することもある。本節では、無意識に発話された間投詞と意識的に発話された間投詞を、例を用いて検証する。

まずは、(5)と(6)のように無意識に発話された間投詞をみってみる。(5)は situation comedy の *The Big Bang Theory* からの引用で、Penny のアルバイト先である Cheesecake Factory で、最近何か変わったことがあったかと Leonard が質問する場面、(6)は間違って届いた隣人の Penny の郵便物を、Leonard が届けるシーンである。

- (5) Leonard: What's new at the Cheesecake Factory?  
Penny: **Oh, uh**, not much. We do have a chocolate key lime that's moving pretty well.  
(17:38-, "The Fuzzy Boots Corollary," *The Big Bang Theory*, Season 1.)
- (6) Penny: Is, is everything okay?  
Leonard: **Uh**, yeah, **uh**, I just, I got your mail again, here.  
Penny: **Oh**, thank you, I've got to talk to that mailman.  
(02:51-, "The Fuzzy Boots Corollary", *The Big Bang Theory*, Season 1.)

(5)と(6)で見られる間投詞の例は、どれも話者によって無意識に発話されたと考えられる。また、聞き手も発話された間投詞を聞いてその間投詞の意味をわざわざ考えていない。あくまでも話者は間投詞以降の文の意味を聞き手に伝えたいのであり、聞き手にその間投詞を発話した意図を推測させようとはしていない。

次に、(7)と(8)のように、話者によって意識的に発話されたと考えられる間投詞の例をみってみる。どちらの例も *The Big Bang Theory* からとったものである。実際に例文を読む前に、後に行う考察をより理解してもらうために、事前知識として各登場人物について少し説明をする。(7)の Sheldon は IQ187 という並外れた頭脳を持つ博士で、プライドが高く皮肉屋で、低学歴な人間を見下している。Penny は Sheldon の隣人であり、低学歴のブロンド美女で、誰にでも分け隔てなく接するが、変わり者の Sheldon の言動には懲り懲りしており、皮肉で対応することもしばしばである。(8)の Lesley は Leonard が所属する大学で働いている女性で、性に奔放であり、思ったことは何でも口にしてしまう学者である。Leonard もまた IQ173 の天才研究者であるが、Sheldon と違い内気で自分に自信がない。

では、例文をみってみる。(7)はスーパーに行こうとしている Penny に対し、Sheldon が買

ってきて欲しいものを羅列する場面、(8)はキスの実験をした直後の Lesley と Leonard が、お互いのキスについて意見を述べ合う場面である。

- (7) Sheldon: I need eggs. Four dozen should suffice.  
Penny: Four dozen?  
Sheldon: Yes, and evenly distributed amongst brown, white, free range, large, extra-large and jumbo.  
Penny: Okay, one more time?  
Sheldon: Never mind, you won't get it right, I'd better come with you.  
Penny: **Oh**, yay!  
(05:10-, "The Luminous Fish Effect", *The Big Bang Theory*, Season 1.)
- (8) Lesley: What do you think?  
Leonard: You proposed the experiment, I think you should present your findings first.  
Lesley: Fair enough. On the plus side, it was a good kiss, reasonable technique, no extraneous spittle. On the other hand, no arousal.  
Leonard: None?  
Lesley: None.  
Leonard: **Ah**. ...Well, thank you for your time.  
(07:03-, "The Fuzzy Boots Corollary", *The Big Bang Theory*, Season 1.)

(7)において、Sheldonに「どうせ買ってきて欲しいものを覚えられないのだから一緒に行った方が早い」というようなことを言われた挙句、返事をする前に部屋を出て行かれた Pennyの心的状況は、本当に yay なわけがない。Oh という間投詞を皮肉っぽく発話することでその命題態度<sup>(1)</sup>が聞き手に伝わり、yay という高次表意の皮肉に対する話者の命題態度を、より強化していると考えられる。(8)では、Lesley から「技術はまずまずだが性的興奮はなかった」というキスの評価を受け、Leonard はショック気味に「何も？」と聞き返すが、即座に「何も」と返答されてしまう。それに対して遠くを見つめ Ah とだけ答え、少ししてから「協力ありがとう」と締めくくっているが、間投詞の部分は日本語字幕では訳されていない。しかし、聞き手にはその間投詞が単なる納得を意味しているのではなく、Leonard の焦りや絶望、不安などの感情が伝わる。つまり、この Ah という間投詞は、Leonard の自虐という命題態度を聞き手に伝えていていると考えられる。

(7) と (8) でみた間投詞が意図的に情報を伝えようとして使われていると考えられるもう一つの理由に、(7) では live audience (観客) の笑い声 (canned laughter) が、入っていることも挙げられる。(7) と (8) で使用されている間投詞は、話者が直接聞き手に発話しているのではなく、視聴者に向けて発話しているため、コミュニケーションと言って良いのかという反論が出るかもしれない。しかし、一方的なものではあるが、シチュエーショ

ンコメディは「登場人物が繰り広げる会話」と「それを見聞きしている視聴者」との間での、コミュニケーションの一種であると捉えることができるであろう。まとめると、間投詞には聞き手に別の意味を伝える伝達的な場合とそうではない場合があるといえる。では、どちらが本来の用法なのであろうか。次章で理論的な考察を加える。

### 3. 先行研究と問題点

本節では、2節で区別した間投詞の違いを、関連性理論 (relevance theory) の概念を用いて分析し、他の間投詞の先行研究と比較した上で、その問題点を述べる。

#### 3.1. 関連性理論でみる間投詞

関連性理論 (relevance theory) とは、Paul Grice (1975) が提案した「協調の原理 (cooperative principle)」に対して、Sperber & Wilson (1986) が提唱した理論である。協調の原理とは、会話は話し手に対する聞き手の協調的な行動により成立するという考えを基に提唱された理論であり、Quantity (必要以上に情報を与えてはいけない)、Quality (嘘をついてはいけない)、Relation (関係のないことは言わない)、Manner (曖昧な表現は使わない) という4つの公理をコミュニケーションの基礎とした原理である。これに対し Sperber と Wilson は、これら4つの格率のうちの Relation (関連性) に焦点を当て、「発話解釈がグライスの主張するような複数の格率 (maxims) によって導かれるのではなく、単一の原理によって支配されていると」(Allott 2010/今井訳 2014: 258-259) 説明している。そして、文の意味と話者が本当に伝えたいことの間には大きなギャップがあると考え、そのギャップを聞き手がどう埋めるかの過程を研究対象とした。

2.2. でみたように、間投詞には話者の何らかの意図を伝える伝達的なものと、そうでないものに区別することができる。これを関連性理論で説明すると、話者に発話された間投詞が聞き手の「認知環境 (cognitive environment)」<sup>(2)</sup> に「認知効果 (cognitive effect)」<sup>(3)</sup> を与えることが意図されているか否かによってこのような違いが生じる。

(5) と (6) において、話者によって発話された間投詞は聞き手の認知環境に認知効果を与えておらず、また、話者もその間投詞を無意識に発話しており、聞き手に何か別の意味を伝えようとしていない。そのため、意図明示的伝達行為 (行為者がその行為を行うことで何らかの意味を伝えようとする) ではないと考えられる。それに対して (7) と (8)

では、話者が発話した間投詞が聞き手の認知環境に認知効果を与え、聞き手は、それに基づいて自らの認知環境を更新していると思われる。(7)と(8)の間投詞と(5)と(6)で発話されている間投詞の違いは、本来無意識に発話される間投詞を話者が意識的に発話している点である。つまり、(7)と(8)の間投詞は、メタ言語的に使用されているとも考えられる。間投詞のメタ言語的使用とは、話者が意識的に間投詞を発話することで、その命題態度を聞き手に伝え、また、後続の発話の命題態度をより補強するという使用方法である。

### 3.2. 思考の言語としての間投詞

Noam Chomsky (2012) と Chomsky & Berwick (2015) は、言語は思考の道具であると述べている。

- (9) Now let's take language. What is its characteristic use? Well, probably 99.9 percent of its use is internal to the mind. You can't go a minute without talking to yourself. It takes an incredible act of will not to talk to yourself. We don't often talk to ourselves in sentences. There's obviously language going on in our heads, but in patches, in parallel, in fragmentary pieces, and so on. (Chomsky 2012: 11-12)
- (10) One suggestion that Jerry [Fodor] proposes which seems to me to require more evidence is that there is a language of thought. And the question is whether the language of thought is any different from whatever our universal, internal language is. As far as I can see, we can't tell anything about the language of thought other than it's a reflection of whatever our language is. (Chomsky 2012: 71-72)
- (11) 言語は思考と密接に関わっているというダーウィンの見解には、私たちが賛同している。古神経学者のハリー・ジェリソンの言葉を借りると言語は「内的な心的道具」なのだ。(Chomsky, Berwick 2015/渡会訳 2017: 11)
- (12) コミュニケーションが言語の「機能」であるという現代の学説は間違いであり、言語は思考の道具であるという、昔ながらの考えのほうが正解に近いということになるだろう。根本的には、言語は実際に、「思考のための聞こえる記号」のシステムだ。このホイットニーの言葉は、昔ながらの見解を表している。(Chomsky, Berwick 2015/渡会訳 2017: 133)

従って、言語は思考の道具であり、言語全般がコミュニケーションのための道具ではないと主張している。発話という形で表出された言語が我々の思考の反映にすぎないのであれば、間投詞は発話者の咄嗟の感情を表すという点でも、この主張は正しいと考えられる。つまり、言語要素である間投詞も、思考の道具でありコミュニケーションを意図した言語表現ではないということになる。

山本（2007）の、海外語学研修に参加した日本人英語学習者の *well* の使い方が研修を経てどのように変化するのか、また彼らは *well* どのように習得していくのかについての実験が、この主張の裏付けとなる。実験は 27 名の日本人大学生を対象に行われた。彼らは約 6 週間に渡り一般家庭に滞在し、その間英語の授業を週 25 時間受講した。研修前には英語母語話者との 1 対 1 の自由会話をするという実験を行い、研修後にも同様の実験を行った。研修前後の総発話数を比較した結果、研修前は 20,433 語、研修後は 30,326 語であった。このように、発話全般に関して言えば、研究参加者のアウトプット能力が向上したことがわかる。対照的に、研修前後の *well* の使用頻度については、(13) と (14) のような結果が出た。

- (13) 学習者の多くは研修の前と後どちらの時点でも *well* を用いていなかった (...)  
用いていた学習者に対しても、母語話者に比べて使用回数がかなり少なかった。  
(山本 2007: 340)
- (14) 研修前の時点で *well* を用いていた学習者は、*well* の前後に「(ウー)ン」や「ナンダッケ」など語彙を探していることを示す日本語のフィラーを用いる、あるいは沈黙する傾向があることが明らかになった。  
(山本 2007: 341)

まとめると、英語での発話数が増えたにも関わらず、それに付随して *well* の使用頻度は上がらなかった。また、使用回数が母語話者に比べてかなり少なく、思考する際は自然と母語を用いていた。以上のことから、日本語話者が第二言語の英語を話す際に使用する間投詞は、かなり意識的に使用されていると考えられる。つまり、第二言語では間投詞を無意識に発話するのが難しく、話者は間投詞をあくまでも思考するための道具として使うため、第二言語で思考するときも自然と母語の間投詞で思考していると考えられる。

Clark (2013: 302) でも、(15) のような見解が述べられている。

- (15) The alternative view is that our internal conceptual representation system is a language whose function is to enable us to think, and then see languages like English or Sanskrit as enabling us to externalize our thought. Sperber and Wilson (1986: 173-4) express this view, comparing our use of language as a means of communication with an elephant's use of its trunk to pick things up.  
(Clark 2013: 302)

言葉がなければ考えることができない。発話された言語は「思考の言語」であり、自分の考えを外延化させるためにある。象の鼻の本来の役割は匂いを嗅ぐことであり、モノを持ち上げたりつかんだりするのは二次的な役割である。同様に、コミュニケーションの道具

としての言語の使用も二次的なものであると主張されている。

以上考察してきたように、言葉は思考のための道具であると考えられ、そうであるなら、間投詞がコミュニケーションのために用いられていないことは全く不思議なことではない。しかし、言語が思考するための道具であり、話者の意図の手がかりにすぎないのであれば、(6) や (7) で見たように話者によって皮肉や自虐として意図的に発話された間投詞の説明がつかない。これを1つ目の問題点として4節で考えてみたい。

### 3.3. コミュニケーションの言語としての間投詞

本当に間投詞は単なる思考の言語として捉えられるだろうか。西川 (2002) と水野 (2006) は、間投詞が話者の思考を意図的に伝達したものだとしている。(16) の DM とは、「うーん」「えー」など、談話の流れをコントロールするために話者が無意識に発話する Discourse Marker (談話標識) のことである。

- (16) DM oh を先行させ、「何かがあった今自分の頭の中に入ってきた」という心的状態に聞き手の注意を向けさせることが、相手に反論、命令、依頼、(迷惑な) 質問をする時、対人関係をうまく保つ有効な手段として働く場合がある。  
(西川 2002: 120)
- (17) 副詞や感動詞に分類される「まあ」を取り上げ、これもまた心的な操作に関わる標識であることを指摘し、間接的に「まあ」が心内で起こる情報データの処理状況を表していることを主張する。(…)「まあ」は推論するために情報のリストを推論過程に移行する標識である。(…) 聞き手に対して推論プロセスを経たことを伝えることにより、働きかけや話者の心的状況を知らせる効果がある。  
(水野 2006: 123)

つまり、話者は間投詞を発話することで聞き手に何らかの話者の意図を伝えようとしている、と主張されている。

その一方で Wharton (2003) は間投詞を言語の一部ではないと主張しているが、間投詞はコード化されていると述べている。

- (18) a. The answer, then, is no, interjections are not part of language; but the continuum does offer a framework within which they might be seen as on the edge of language, integrated to a greater or lesser extent: to use Goffman's expression—*semiwords*.  
(Wharton 2003: 67)
- b. Interjections communicate attitudinal information, relating to the emotional or mental state of the speaker.  
(Wharton 2003: 64)

間投詞は言語の一部ではないが、話し手の感情や精神状態に関する情報を伝える役割を持っているということになる。この coded (コード化) とは、どのような概念なのだろうか。

(19) 「概念的コード化」と「手続き的コード化」

名詞や動詞、形容詞など、内容語の大部分は概念をコード化しており、発話解釈の際には意味論的解読プロセスによって概念表示の構成要素として表意の形成に貢献する。(…)

対して、それら概念からなる概念表示をどのように推論するべきかという指示をする、手続き的な情報をコード化しているものがある。(洪水 2013: 13-14)

- (20) 言語表現は、手続き的意味 (procedural meaning) と概念的意味 (conceptual meaning) の両方を持つ場合もあるし、手続き的意味のみを持つ場合もある。(…) 手続き的意味は、発話解釈にかかわる語用論的推論過程を制約し、舵取りを行う。(…) 例えば、指示を表す *that* (あれ) は、「話し手に接近していない単数の指示対象を見つけよ」という説明に当たる制約を符号化している。However は、「直前の談話によって生じた期待を否定するように、後続するものを処理せよ」という説明に相当する制約を符号化していると言って差し支えないだろう。(Allott 2010/今井訳 2014: 239-240)

コード化という観点から考えると、間投詞は手続き的意味をコード化しており、定められた概念では表現することのできない話し手の心的状況を伝達する役割があると考えられる。仮に間投詞が本当に手続き的意味をコード化しているのであれば、発話された間投詞はいかなる場合も話者の意図として推論されなければならない。しかし (5) や (6) で見たように、間投詞は時には非伝達的に用いられていると思われる場合もある。これを 2 つ目の問題点として次節で考察する。

#### 4. 考察

第 3 章では先行研究の 2 つの問題点を提示した。1 つ目は、言語が思考するための道具であり、話者の意図の手がかりにすぎないのであれば、話者によって皮肉や自虐として意図的に発話された間投詞の説明がつかないという点。2 つ目は、もしも間投詞が本当に手続き的意味をコード化しているのであれば、発話された間投詞はいかなる場合も話者の意図として理解されなければならないという点である。以下では、間投詞を内的思考の外延

化とし、外延化された間投詞はメタ言語的に使用されていると主張する。

まず1点目の問題点についてだが、関連性理論の枠組みを採用することで解決することができる。第2章で、間投詞は意図明示的なものと非意図明示的なものに区別できると述べた。本来間投詞は話者の咄嗟の感情を表し、無意識に発話される言語であるため非意図明示的であり、Chomskyの言うように思考の言語であると考えられる。しかし、間投詞は話者が意識的に発話することにより、意図明示的伝達行為として使用することもできる。それは話者がもともと思考の言語である間投詞を意識的に使用し、間合いや、強いイントネーションなどを用いて聞き手に対して何かを伝えようという意思を持って発話していることを明示できるためである。従って、間投詞は思考の道具の一部であるが、話者の意図が入ると、意味を持つことができる。

2点目の問題点は、「間投詞が手続き的にコード化されている」という主張がされていることであった。この主張によれば、全ての間投詞が意図明示的な要素として分析されてしまうことになる。しかし、間投詞が意図明示的な要素ではない可能性がある。そうだとすれば、間投詞は「概念的コード化」と「手続き的コード化」の分類に馴染まない第3の言語要素である可能性がある。その証拠は直接引用と間接引用の差である。

まず、概念的にコード化された要素は、(21)のように直接引用にも間接引用にも入る。(21a)の Ross and Rachel got married eventually という Tom の発話は全文を通して概念的にコード化された単語で構成されている。

- (21) a. Tom: Ross and Rachel got married eventually.
- b. Tom said, "Ross and Rachel got married eventually." (直接引用)
- c. Tom said that Ross and Rachel had got married eventually. (間接引用)

そして、(22)の but や so のように典型的に手続き的にコード化されていると言われている要素も入る。

- (22) a. John said that Tom is a teacher **but** nice.
- b. John said that Tom is a teacher, **so** he is nice.

しかし、間投詞を含む発話を引用した場合は、(23)のようになる。

- (23) a. Leonard: **Ah**. Well, thank you for your time. [= (8) ]

- b. He said, “*Ah*. Well, thank you for your time.”
- c. He said that he was grateful to her taking time for him.

(23c) のように、間投詞を含む発話を間接引用する場合、間投詞は引用に含まれない。また、(24) で定義されているような引用的に用いられる *like* に基づいても同様の議論ができる。

- (24) In recent years the structure *be like*, meaning ‘say’, has become common in informal speech as a reporting formula, especially when describing people’s attitudes.  
(*Practical English Usage*, p.257)

(25) はアメリカの深夜トークショー *The Tonight Show Starring Jimmy Fallon* で、女優の Jennifer Lawrence と主演の Jimmy Fallon が、お互いの最も恥ずかしかった瞬間を語り合っている際の会話である。I was like を用いて説明している。

- (25) Jimmy: I met Clark Davis, so I'll make this quick. I saw him again at a big table.  
Jennifer: Hurry hurry hurry!  
Jimmy: Yeah, he was at a table he was sitting there. I should say Hi. it's Clive Davis, so I went over and there's a big table with a group of people. I went over and 'Hi, Clark, I'm Jimmy Fallon.' And then he goes like..... So I go 'Does he want me to kiss him on the cheek?', so I went and I kissed him. And he was like 'WHAT?' and I go 'What?' And this is whoever he was with was like, 'He couldn't hear what you are saying.' ***I was like 'Oh....'***

この場合も間投詞が I was like を用いることで直接引用されているが、間接引用しようとした場合、“He said that he was shocked by the comment.”のようになり、もとの Oh という発話は消えてしまう。従って、間投詞は直接引用できても間接引用することはできない。つまり、間接引用の中には、話者が聞き手に本当に伝えたいことしか入らない。もしも間投詞が手続きの意味をコード化しているのであれば、発話された間投詞はいかなる場合も話者の意図として理解されなければならないため、間接引用にも反映されなければならない。しかし、間投詞は入らないため、伝えたいことにはならないということになる。

従って、間投詞はコミュニケーションのための言語表現ではない。だからといって英語という言語の一部でないと述べているわけではなく、間投詞は自分の考えを整理するための言語であり、一見伝達機能があるように見える間投詞の例は、コミュニケーション機能が備わっているわけではなく、皮肉や自虐などのルールが加えられたメタ言語的表現であると言える。

## 5. まとめ

本稿では、間投詞がコミュニケーションのための言語であるかについての考察を行った。第2章でみたように、発話された間投詞は非意図明示的なものと意図明示的なものに区別することができる。第3章では、言語を思考の道具とする立場と、間投詞は聞き手に話者の意図を伝えているという立場の先行研究をみて、その問題点を指摘した。その結果、第4章で考察したように言語は思考の道具であるため、間投詞もその一部であると考えることができた。意図明示的の伝達行為としての間投詞の発話は、話者が本来無意識に発話され聞き手に意図を伝えるために発話されるわけではない間投詞を、意識的に発話することによって、一定の話者意味を伝える場合がある。それはあくまでもメタ言語的表現であり、間投詞自体はコミュニケーションのための言語表現ではないという結論を出した。今後は、自分の主張をさらに裏付けるための根拠を集め、より説得力のある考察を行うことを課題とする。

注

- \* 本稿を執筆するにあたり、非常に有益な助言をして下さった査読者に感謝する。
- (1) 命題内容に対する心的状態のこと (Allott 2010/今井 2014: 243)。
  - (2) その時点において真 (true) であるとして受け入れることのできる思想の集合 (Allott 2010/今井 2014: 45)。
  - (3) 発話やその他の刺激によって、①既存の認知環境にある想定が裏付け、強化されたり、②新たな想定と既存の想定が矛盾して後者が放棄されたり、③新たな想定が既存のものと結びついて、新たな結論を推論するという効果。

参考文献

- Chomsky, Noam. 2012. *The Science of Language Interviews with James McGilivray*. Cambridge University Press.
- Clark, Billy. 2013. *Relevance Theory*. Cambridge University Press.
- 今井邦彦 (監訳) . 2014. 『語用論キータム事典』開拓社。(Allott, Nicholas. 2010. *Key Terms in Pragmatics*. London: The Continuum International Publishing Group.)
- 水野吉徳. 2006. 「談話管理から見た標識『まあ』について」『日本語用論学会第10回大会発表論文集』第2号, 121-126.
- 守田貴弘. 2016. 「言語進化におけるコミュニケーションと思考—意味的普遍性と言語多様性を

めぐって一』『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第 18 号, 78-102.

西川真由美. 2008. 「DM look の手続きの意味」『日本語用論学会第 11 回大会発表論文集』第 4, 79-86.

渋木航. 2013. 「関連性理論における推論のはたらき」(未刊行)

Swan, Michael. 2017. *Practical English Usage: Michael Swan's Guide to Problems in English*: Oxford.

渡会圭子 (訳). 2017. 『チョムスキー言語学講義—言語はいかにして進化したか』筑摩書 (Robert C. Berwick・Noam Chomsky. 2015. *Why Only Us: Language and Evolution*: The MIT Press.)

Wharton, Tim. 2003. Interjections, language and the showing-saying continuum. *Pragmatics and Cognition* 11, 39-91.

山本綾. 2007. 「談話標識 well の習得に関する一考察—海外語学研修に参加した日本人学習者の場合—」『日本語用論学会第 10 回大会発表論文集』第 3 号, 339-342.

辞書

*Oxford Advanced Learner's Dictionary NEW 9<sup>th</sup> Edition* 2014.

*LONGMAN Dictionary of Contemporary English 6<sup>th</sup> EDITION* 2015.

引用例文出典

“The Fuzzy Boots Corollary”, *The Big Bang Theory*, Season 1.

“The Luminous Fish Effect”, *The Big Bang Theory*, Season 1.

Kishimoto, M. 2009. *NARUTO*, Volume43. the U.S.A.

*The Tonight Show Starring Jimmy Fallon*.